令和３年６月県議会　一般質問

自由民主党県議団　佐々木祥二

１、３６災害を教訓とした天竜川流域における災害対策について
　① 学校教育への仕組みについて　　（教育長）
　② 流域治水プロジェクトについて　　（建設部長）
　③ 防災教育の取組みについて　　（建設部長）
　④ 安全安心の県土作りについて　　（知事）

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について
　① リニア整備後の振興策について　　（リニア推進局長）
　② ２次交通の在り方について　　（リニア推進局長）
　③ 観光振興策と関連事業について　　（観光部長）
　④ リニア開業の遅延による関連事業への影響について（リニア推進局長）
　⑤ 発生土の有効活用について　　（リニア推進局長）

３、まとめ

拝　佐々木祥二であります。令和３年６月県議会における一般質問にあたり、私見を交えながら質問させて戴きますので、知事及び執行部の皆様には、前向きで具体的で明解な答弁を期待するものであります。

１、３６災害を教訓とした天竜川流域における災害対策について

① 学校教育への仕組みについて　　（教育長）

まず初めに、今からちょうど６０年前、昭和３６年６月２３日から降り続いた梅雨前線による大雨は、３０日までの８日間で５００ミリメートル以上に達し、各地で大規模な土石流や氾濫が起きました。天竜川は支流に流れ込んだ土石流で川底が上がり、満水となり、堤防が決壊されました。伊那谷で１万か所以上で災害になり、地域全体が大災害となりました。

交通や通信網が寸断され、孤立した集落は食糧や飲み水も底をつき、伊那谷全体が恐怖のどん底に陥りました。県下で１３６名もの犠牲者を出し、被害総額は３４０億円（今の価値では１，２２４億円）でした。

この大災害は「３６災害」として人々の心の中の記憶に深く刻み込まれています。この災害から今年、ちょうど６０年を迎えました。災害の犠牲になられましたすべての皆様に心よりご冥福をお祈り申し上げ質問に入ります。

昭和３９年１２月２３日発行の「濁流の子―伊那谷災害の記録―」の中に、駒ヶ根市中沢小学校東分校一年の、双山美也子さんの当時の作品がございます。原文のまま読みます。

「死線をこえて」ふたつやま　みやこ

みやこのうちへ、「おんどりや」のとこから水が入ってきた。ようさ、みやこたちがねとるとき、水がうんと、にわのとこへ、はいってきた。とおりまで、ついてきたもんで、おとうちゃが「にげる」ちゅった。おとうちゃとおかあちゃは、うらぐちにみにいった。おじいちゃが「くらがいい」とおもったもんで、みやこたちも、みんな、くらにはいった。

そのとき、水がうんと、川のようにきたもんで、くらはつぶれちゃった。みやこは土や砂やいろいろ、いっぺんにのんだ。うりやぶのところまで、ながされていった。おとうちゃが「しんじゃたまらん」とゆった。ゆずらのきのとこに、おとうちゃはおちたもんで、うまくすくわれた。それで、でんしんばしらにつかまった。「ゆき」がちょこんと、くらのまんなかにたっていた。みやこは、おじいちゃとおばあちゃのあいさにへえって、くるしかった。みやこのとこへ、木やざいもく、ふとんやら、いっぺえきたもんで、おとうちゃが、ざいもくやいろいろどかして、だしてくれた。そのとき、おじいちゃやおばあちゃはしんどった。

九死に一生を得た彼女は、当時のことを振り返りながら次のように語っていました。

「６月２８日夕方から、どんどん家の中に水が入ってきた。夜半ごろ、家の中は危ないということで、祖父母と私を含め兄弟３人が土蔵へ逃げた。両親は外に見回りに行き、そしてその一瞬、山津波、土石流が襲い、母と祖父母、兄が亡くなり、その中で助かったのは、父と３歳の弟と私の３人でした。そこから濁流を渡って安全と思われるほうへ逃げた。その時弟は濁流にのまれ、行方がわからず、６０年経った今も見つかりません。そして母は２３回忌にやっと遺骨があがりました。

災害から２日後、父と一緒に家に帰ったら家も、田畑も跡形もなく、何もありませんでした。と「続・濁流の子」に記してありました。

このような悲惨な災害を繰り返さないためにも、社会教育、防災教育、そして学校教育に至るまで、継ぎ目のない事業の重要性を訴えていかなければなりません。３６災害から６０年となる中で、学校教育の場でもこの３６災害を学び、伝えていく、教育の仕組みが必要だと考えますが、教育長のご所見をお伺いいたします。

答弁：原山教育長

児童生徒が災害を身近な経験としてとらえるため、地域の災害の歴史を学ぶことは重要であると認識しています。

３６災害を学ぶ取組みとして、例えば、

・飯田市では、当時の小学生の手記や災害の状況について取り扱った副教材を小学校３，４年生と中学生が学習している。

・伊那市では、三峰川との共存について、独自の教本を使って小学４年生が学習している。

県教育委員会では、平成２３年の東日本大震災を契機として「学校における防災教育の手引き」を作成し、今年２月に令和元年の台風第１９号災害の内容を追加するなどの改訂をしたところです。この手引きでは、３６災害を含めて本県で発生した多くの災害について掲載し、学校での防災教育に活用しています。

今後も、児童生徒が過去の災害を学び、将来、災害に直面したときに、状況を適切に判断し、自らの命を守る行動をとれるよう、防災教育の一層の充実に取り組んで参りたい。

１、３６災害を教訓とした天竜川流域における災害対策について
② 流域治水プロジェクトについて　　（建設部長）

防災は一人一人の問題であると同時に、市町村・県・国の問題でもあります。
３６災害後、今日まで、伊那谷地方では復旧工事やダムを含めた防災工事、砂防工事が進められ、国で７３基、県で３７６基の砂防堰堤の整備が進み、それに直轄治山工事も続けられました。そして伊那谷地方は昭和５８年に伊那谷を襲った３６災害に匹敵する豪雨に際しても人的被害はなく、ダムや砂防施設のお陰で被害も少なくて済みました。

国の発表資料によれば、令和元年１０月、台風１９号により３６年災害を越える６３８ミリメートルの総雨量を観測しましたが、３６災害後の着実な砂防堰堤整備により、土砂洪水氾濫を完全に防止いたしました。これまで３６災害から砂防の設備投資、約３３０億円により、流域の約８７０億円余の資産に対して被害を軽減したとされています。また、最近では、令和２年７月豪雨において、６月３０日から７月１２日まで降り続いた雨は、伊那市北沢の雨量観測所では、１，０６３ミリメートル、最大時間雨量２６ミリメートルと降り、３６災害のなんと２、４倍の雨量でしたが、三峰川の堤防決壊や天龍村の土砂崩壊はあったものの、３６災害ほどの大きな災害とはなりませんでした。大変ありがたいことです。

今後も施設能力を超過する洪水や土石流が激化することが考えられます。そのためには、社会全体で洪水に備え、河川の流域全体のあらゆる関係者が協働して、流域全体で行う持続可能な治水対策が必要であると考えます。リニア中央新幹線を迎えて、飛躍する伊那谷を守る流域治水対策として「天竜川上流流域治水プロジェクト」が始まります。このプロジェクトでは、堤防整備や、施設能力を超過する洪水が発生することを前提に、河道拡幅や、堤防整備等の「河川における対策」のほかに「ソフト対策」として、住まいの方の工夫や住民避難に関する取組み、さらには「流域」における対策として、雨水貯留施設の整備や、ため池、田んぼ等を活用した流出抑制に取組むと記してあります。この「流域治水プロジェクト」に県として、どの様にかかわっていくのか。また、「ソフト対策」については、地域を巻き込んで、住民とタイアップしていく必要があると考えますが、あわせて建設部長のご所見をお伺いいたします。

答弁：田下建設部長

県では、プロジェクトに位置付けた河川、砂防等のハード対策につきまして、例えば、天竜川上流流域治水プロジェクトにおける、伊那市大沢川の河道拡幅や駒ヶ根市瀬早川での砂防堰堤設置など、5か年加速化対策予算を最大限活用し、効果が発揮佐有れるように、進捗を速めて参ります。

また、雨水の流出抑制対策につきましては、本年２月に策定した長野県流域治水推進計画に基づき、一般住宅への雨水貯留タンク普及を促すため、まずは県有施設４３９か所へ施地位を推進しているところであり、さらに、農政部との連携により、ため池等の活用について、市町村や関係者の皆様にご理解いただくため、研修会を開催したところです。

「逃げ遅れゼロ」に向けた取組みに関しましては、国、県が作成する「浸水想定区域図」などをもとに、危機管理部や健康福祉部による県政出前講座やマップ作成支援員による

実地指導等により、住民の皆様に対して「マイタイムライン」や「災害時住宅支え合いマップ」の作成を促してまいります。
　現在「流域治水キャンペーン」と銘打って、TV 等、様々な媒体により、住民に向けた PR を行っており、今後とも市町村と共に、住民の皆様へ浸透を図る努力を続けてまいります。

１、３６災害を教訓とした天竜川流域における災害対策について
③ 防災教育の取組みについて　　（建設部長）

　過去に起こった災害や、危険から身を守る方法などを、地域で学ぶ「赤牛先生」派遣による社会教育や、防災教育の取組みは非常に重要だと考えます。現在の「赤牛先生」を派遣する取組状況と、地域防災力向上に向けたお考えを建設部長のご所見をお伺いいたします。

答弁：田下建設部長

　県では、土砂災害のおそれのある地域の公民館や小中学校等に、土砂災害の専門家を講師として派遣する「赤牛先生派遣事業」を令和元年度から始め、これまでに８７か所で実施し、住民の皆さん、のべ２，７６０人の方が参加しています。
　また、全国をみますと、近年の豪雨災害では、高齢者福祉施設を利用する方が逃げ遅れ、被災した事例が多くみられることから、今年度から、対象を要配慮者利用施設で従事する方々に広げ、講習会を行ってまいります。
　なお、令和元年東日本台風における土砂災害の警戒避難に関する住民アンケート結果では、講習会等参加することにより、効果的に避難行動につながっていることから、この取り組みは大変重要であると認識しております。
　地域防災力の向上には、地域住民一人一人が土砂災害や水害を「我が事として捉える防災意識」を醸成することが大切であると考えています。二度と悲惨な災害を被ることのないよう防災教育を始めとする様々な取り組みを積極的に実施してまいります。

１、３６災害を教訓とした天竜川流域における災害対策について
④ 安全安心の県土作りについて　　（知事）
　この３６災害等の教訓をいかに継承し、近年頻発している異常気象による、大規模な災害をいかにして防ぎ、すべての県民が安全で安心して暮らせる、安定した地域づくりをいかにしていくのか、知事のご所見とご決意のほどをお伺いいたします。

答弁：阿部知事

　伊那谷における３６災害をはじめ、本県はこれまであまたの災害を経験しながら、今日に至っております。県民の皆様方の生命と財産を守るためには、これまで経験してきた

災害の教訓をしっかりと引き継ぎながら、教訓を踏まえた対策を講じていくと言うことが大変重要だと考えています。

県としての取組みへの反映であります。３６災害においては、支川からの多量の土砂流入により、天竜川本川での河床上昇、堤防の決壊・氾濫等が生じたため、支川における砂防堰堤等の整備を進め、流域全体の減災に努めてきております。

また、土砂災害警戒区域等の設定をはじめとするリスク情報の提供も県として積極的に進めてきているところであります。

こうしたことに加え、今後は流域治水、あるいは逃げ遅れゼロということで、流域の市町村、事業者そして住民の皆様と一緒に災害対策を進めて行くことが極めて重要だと思っています。

こうした取り組みに、多くの皆様方に関心を持っていただき、一緒に取り組んでいただく上でも、この教訓をわかりやすく伝えていくと言うことが大変重要だと思っております。

そういう観点で、先ほどご質問のあった学校教育であったり、赤牛先生の派遣であったり、こうした授業が大変有効になってくるものと考えております。

今後、県民の皆様方の命と暮らしを守るために「防災・減災、国土強靭化のための５か年加速化対策」予算を最大限活用しながら、国、市町村をはじめとする関係団体の皆様方としっかり連携をし、かつ、県民の皆様の問題意識、会話をしながら理解とご協力を得ながら、災害対応を進めて行きたいと思っています。引き続き行政の基本的な役割として、災害に強い県づくりを鋭意進めて行きたいと考えております。

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について

① リニア整備後の振興策について　　（リニア推進局長）

翔ぶ鉄道、夢の超特急リニア中央新幹線整備事業の現状とアフターコロナを見据えた、地域振興策についてお伺いいたします。

天竜川を中心に、ふたつのアルプスに抱かれた「伊那谷」は、深く豊かな自然環境と、南信地域特有の文化が育む、潜在的なポテンシャルを持ちながらも「人口減少」が「経済の縮小」を招き、多くの課題を抱えている地域であります。

そこへ、翔ぶ鉄道、夢の超特急が伊那谷を翔ぶわけであります。地元自治体では、「未来を先取りしたリニア時代の街づくり」「伊那谷の定住交流人口の増加」「リニアを活かした産業振興」などを進め、これまでも、高速道路や国道バイパスなど交通網整備、工業団地への企業誘致、温泉や国際山岳観光などの拡充に取り組んできていますが、新型コロナウイルスによる昨今の社会情勢への影響により、一層厳しい状況であります。

こうした中、地元のリニア整備への期待は大きく、大都市圏との移動時間の大幅な短縮は、首都圏の新しいヒンターランド（後背地）となり、東京の機能分配の適地に成長する可能性があり、伊那谷の生活圏や地域住民のライフスタイルに大きな変化をもたらすと考えられます。この度の新型コロナウイルス感染症の拡大は、私達のプロジェクトと衣食住の在り方に大きな影響を与え、今後の社会活動や生活様式の見直しが求められています。

今、「アフターコロナ」を見据えた、「リニア整備後の地域振興策」を改めて検討すべきと考えますが、リニア整備促進局長のご所見をお伺いいたします。

答弁：田中リニア整備推進局長

県が事務局を担う伊那谷自治体会議では、平成２７年度にリニア開業を見据えた地域振興の指針としてリニアバレー構想を策定し、課題への対応を進めてまいりました。こうした取り組みの成果として、中央アルプスの国定公園化やエス・バードの体制整備などが実現してまいりました。

その一方、デジタル化の急速な進展、２０５０年ゼロカーボン実現に向けた動き、新型コロナを契機とした暮らし方、働き方に対する価値観等の変化など、構想策定時には想定していなかった新たな社会的変化が生じてきております。

このため、伊那谷自治体会議では、リニアバレー構想の見直しを行うこととし、論点の洗い出しを行うとともに、経済団体との意見交換を始めたところです。

これまで進めてきた、広域観光や二次交通整備、キャリヤ教育の取組みを着実に進めつつ、社会の変化に対応した新たな課題についても整理を行い、官民一体となって更なる取り組みを進めてまいります。

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について

②２次交通の在り方について　　（リニア推進局長）

２月に開催されました「伊那谷自治体会議」において、JR 飯田線への乗換新駅設置を見直し、新しい交通システムを考慮した、既存駅との接続方法を検討していくとした方針が、飯田市から提案されたと伺っています。亦、自動運転技術や車両の EV 化など、新しいモビリティーの開発が急速に進む中、伊那バレーリニア交通網の利便性向上に向け、長野県駅からの２次交通は、車と鉄道、それぞれの特性を生かし、目的地や需要に応じた柔軟な対応のできるシステムづくりが有効と思われます。それぞれの関係市町村などの、新たな提案を踏まえ、リニア長野県駅からの２次交通の今後の方向性について、リニア整備促進局長のご所見をお伺いいたします。

答弁：田中リニア整備推進局長

リニア中央新幹線の整備を伊那谷地域の発展につなげるためには、リニア長野県駅を多くの人々にとって利用しやすい駅とする必要があり、JR 飯田線、バス、タクシーなど多様な交通手段による良好なアクセスを確保することが不可欠です。

このため、伊那谷自治体会議ではリニア長野県駅から目的地や移動距離に応じ、２次交通や広域２次交通、更に３次交通の検討主体を明確にし、今後それぞれの主体が、最適な移動手段やルート等の具体化に向けて検討することとしております。

伊那谷地域の重要な交通結節点となるリニア長野県駅の誕生を好機と捉え、MaaS によるモビリティサービスなど、議員ご提案の目的地や需要に応じた柔軟な対応のできる新たなシステム作りも視野に、引き続き、飯田市をはじめとした地元自治体等と共に、駅利用者の利便性に配慮した２次交通の形成に向け、積極的に取り組んでまいります。

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について

③観光振興策と関連事業について　　（観光部長）

地域住民の交通手段として重要な役割を担っている JR 飯田線について、利便性はもとより、価値観の多様化と将来にわたり、充実と活用を計り、飯田線を守っていくことは、伊那谷地域全体の重要な役割と課題であります。

リニア開業に向けて、飯田線の知名度や価値観を高め、アフターコロナの誘客につながるよう、伊那谷の文化、生活に触れる体験ツアーや、飯田線の魅力を活かし、のんびり・ゆっくり旅の「スロートレイン」や、伊那谷縦断列車の運行など、伊那谷の観光振興策とタイアップした、飯田線の活用を積極的に進めるべきだと考えます。リニア開業に向けた観光振興策と JR との観光連携について観光部長のご所見をお伺いいたします。

答弁：渡辺観光部長

JR 飯田線沿線は２つのアルプスの雄大な景色に加え、伝統芸能や食文化など伊那谷ならではの観光素材を有している。

こうした素材を活かし、JR と連携し、

・秘境駅を巡る企画列車の運行
・沿線風景のフォトコンテストの実施
・各駅と連携したリーフレットの配布

などを実施しているところです。

また、来年春の飯田お練りまつりをはじめとする大型催事に向けた、しあわせ信州観光キャンペーンにおいても JR の協力を得てプロモーション等を実施していく予定です。

今後、アフターコロナやリニア開業を見据え、リゾートテレワークなど観光と暮らし方を意識した取り組みについても連携を深めてまいりたい。

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について

④リニア開業の遅延による関連事業への影響について（リニア推進局長）

JR 東海による、県内の「リニア中央新幹線事業」は、平成２８年１１月に、県内で最初の工事となる「南アルプストンネル長野工区」が着手されました。その後、「伊那山地トンネル」や「中央アルプストンネル」更に天竜川と跨ぐ「天竜川橋梁」の準備工事に着手するなど、本格的な工事着手に向け、着実に動き出しています。一方で、静岡県では、大井川に関する水資源の確保に関し、国の有識者会議において依然、議論が続いており、静岡工区の着手は見通しが立たない状況と聴いております。

去る５月１３日に開催された「知事と JR 東海の金子社長とのトップ会談」において、金子社長からは、改めてリニア中央新幹線の東京～名古屋間の２０２７年の開業は難しいとの説明があったと聴いております。

JR 東海は開業時期の見直しを明言していませんが、仮に開業が遅れた場合、すでに沿線地域で進んでいる関連事業の進捗に影響が生じるのか。リニア整備推進局長にご所見を

お伺いいたします。

答弁：田中リニア整備推進局長

先月５月１３日の「阿部知事と JR 東海金子社長とのトップ会談」では、金子社長から、「静岡工区の早期着工、品川−名古屋間の早期開業に取組むと共に、長野県の工事は、引き続きペースを緩めることなくしっかり取り組んでいく」旨の発言がありました。

JR 東海による県内のリニア建設工事の契約率は、５月末までに９割を超え、現在、南アルプストンネル長野工区と伊那山地トンネルで斜坑などの掘削工事が進められております。また、本年の秋からは明かり部の天竜川橋梁下部工に着手されると伺っており、着実に工事が進捗してきております。

また、リニア関連道路整備事業については、国道１５３号伊駒アルプスロードが昨年度から直轄権限代行により事業化され、調査が進められています。また、３月２８日には座光寺スマートインターチェンジが供用開始となり、これに接続する座光寺上郷道路でも工事に着手致しました。

これら関連事業はリニア整備の効果を県内に広く波及させるために必要な事業であり、引き続き、事業の促進を図ってまいります。

２、リニア中央新幹線整備事業の現状と地域振興策について

⑤発生土の有効活用について　　（リニア推進局長）

リニア建設工事に伴う発生土置き場の確保については、沿線市町村はもとより運搬経路に関係する近隣の自治体や住民においても、大きな関心事であります。

事業主体であります JR 東海には、騒音や振動の影響に配慮した環境対策や、生活道路の交通安全対策にしっかりと取り組んでいただくことを大前提に、早期の発生土置き場の決定を期待しています。駒ヶ根市でも２か所程予定していると承知しております。

県内の工事で見込まれている発生土は９００万㎥を越えると伺っています。この発生土は地域活性化対策から見れば、宝の山であり、宝の土であります。南アルプス中央アルプス山脈からの宝の山から、地域振興にいかに活用するかは、地域の知恵にかかっています。昔から「宝の山に乗りながら、手を空にして帰る」と言われます。そんなことの無いように、これから本格的になるリニア建設工事の機会を捉え、公共事業はもとより、地域振興事業と連携した造成等に積極的に活用することは、当該事業の経費節約にもつながるなど、活用度のメリットは大きく、大変有効なことと考えます。地域の活性化に資する活用度の有効利用策について、リニア整備推進局長にご所見をお伺いいたします。

答弁：田中リニア整備推進局長

議員ご指摘の通り、発生土を公共事業や地域振興の拠点施設に活用することができれば、少ないコストで大きな効果が期待できます。

JR 東海によりますと、発生土の活用先については、５月末時点で１１か所が決定したほか、３０か所程度で地元との調整が進められている状況でございます。

このうち、発生土活用先の一つであり、今年４月にリニューアルされた大鹿村運動広場では、豊かな自然環境の中で多くの人たちが集い、スポーツを通じて交流する拠点施設となることが期待されています。また、今後発生土の活用が見込まれる伊那市の「伊那インター工業団地」は、事業が完了すれば新たな企業誘致と雇用拡大につながり、地域振興に寄与するものと思われます。

今後とも、地域の活性化に資する観点から、発生土が有効に活用されるよう、市町村と連携し、JR 東海との調整に努めてまいります。

３、まとめ

それぞれ答弁を戴きました。

３６災害から６０年、もう語り部は少なくなってまいりました。「災害は忘れたころにやってくる」と申します。常に小中学における総合学習の場を有効に活用し、学校教育の段階から、防災教育や、土砂災害対策などの理解を深める取組をしていくことを、ここは教育長に強く要望させていただきます。

災害から尊い人命を守るために、私は、軸足は「ソフト対策」であると思います。地域の方々と連携し、流域治水対策、すなわち消防団や住民総参加の取組みを推進することを建設部長にお願いします。

３６災害後、「禍い転じて福となす」の志を持って、強度の力強い復興意欲の結果、あれから６０年、令和の時代に伊那谷は、災害に力強く立ち向かう地域を目指しています。

知事には、「ハード面」の整備促進支援を強くお願いさせていただきます。観光対策では「飯田線、秘境駅ツアー」など、私は良いと思います。観光部長、どうかお願い致します。

また、伊那谷は新たな夢のリニア新時代に突入しています。夢の超特急がもうすぐ伊那谷を翔ぶのです。この際、リニア効果を最大限活用し、地域の夢や、思いの丈を実現しようではありませんか。今、地域振興・地域活性化は大チャンスです。リニア局長宜しくお願い致します。

もともと道は何処にもないのです。私達が歩いて初めて道はできるのです。道なきリニアの道は夢が切り開くのです。昔から「夢ありて、事始まる」と申します。長野県の夢、また、これからの伊那谷リニア新時代の夢に向けて、夢集め、夢育て、そして、夢の実現に向け、知事・リニア局長、先頭に邁進努力していただくことを心よりお願い申し上げます。丁度時間となりました。私の総ての質問を終了いたします。ご清聴ありがとうございました。